

○帰化植物ノート (5)* (浅井康宏) Yasuhiro ASAI: Miscellaneous notes on the naturalized flora of Japan (5)

近年、外来雑草の侵入は後をたたず、筆者もその同定に追われているが、今回はそのうちのヨーロッパを原産とする有刺のキク科植物の若干について、報告しておきたいと思う。この一連の調査にあたり、種々援助下さっている東京大学理学部の原 寛名誉教授およびニューヨーク植物園の Senior Curator 兼 同市立大学の小山鐵夫教授を始めとする関係者各位、ならびに貴重な資料を提供された太田久次、斉藤吉永両氏に対し、衷心より厚く御礼申上げたい。

11) オニウロコアザミ (新称)

三重県在住の帰化植物研究者として令名ある太田久次氏は、かつて同県下の荒地で大形のキク科植物を採集し、これを京都大学理学部の北村四郎博士が *Onopordum accanthium* L. と同定、報告された (Acta Phytotax. Geobot. 25: 190, 1973)。

ところで最近、筆者も太田氏から同定を依頼された標本の中に、これに類似した一品を見出し、これを *Onopordum illyricum* L., Sp. Pl. 827 (1753) と判定した。

本種は2年草で、Fig. 1のように草丈1m以上にもなり、全草が白軟毛で被われるが、茎の翼には網状の脈を欠き、有刺。葉は卵状披針形、無柄で、羽状を呈する。花冠は桃紫色で2.5~3.5 mm ほどである。

本種は総体的に上記のものに似ているが、しかし根生葉は羽状に全裂することや、頭花の総苞片の幅が広く、しかも先端が反転下向すること、などにより明瞭に区別できる。花期は7~8月。

本属には約15種が知られ、その全てが岩場や岩礫地に好んで生じるほか、向陽の路傍や荒地などにも分布、生育している由。なお本種は地中海沿岸地方を中心とし、ポルトガルやブルガリヤ南部などに広布しており、毛や刺の有無あるいは総苞片の状態や頭花



Fig. 1. *Onopordum illyricum* in full bloom on open waste site of Suzuka-city, Mie Pref. (left) and its flowers (right). Photo by Mr. H. Ohta on July 6, 1973.

* 本誌 50: 311-316, 1975 から続く。

の大きさなどにより、いくつかの亜種（あるいは種のランクで）に分けられている。

しかしながら、ここでは従来からの筆者の見解（植研 55: 29-32, 1980）にもとづき、細かい点には触れず、大きく 1 種として扱っておきたい。

12) セイヨウトゲアザミについて

ヨーロッパの原産で北アメリカにも帰化して、既に一般的な雑草となっているものに *Cirsium arvense* (L.) Scopoli, Fl. Carn. ed. 2, 2: 126, 1772—*Serratula arvensis* L., Sp. Pl. 820, 1753—*Carduus arvensis* (L.) Robson, Brit. Fl. 163, 1777—*Cnicus arvensis* (L.) Hoffmann, Deutsch. Fl. ed. 2, 1: Pt. 2, 130, 1804 がある。

筆者が本種と思われるものの存在に気付いてから、既に10余年が経過したが、いずれも近年、国外から我国へ侵入したことは明らかで、当時、これをエゾノキツネアザミの類似品（エゾノキツネアザミモドキと仮称）としてメモしておいた。

それらは高速道路の法面や宅地造成地、あるいは養鶏場の近くなどの向陽荒地に群生していたが、しかしいずれも Fig. 2(左) のように根生葉を広げた状態で、開花状態のものはいずれも皆無に等しかった。ところで最近、各地で Fig. 2(右) のような開花した個体が相次いで見出され、その詳細な検討を行うことが出来るようになったので、ここに改めて若干のノートを加え、記録しておくこととしたい。



Fig. 2. A young plant of *Cirsium arvense* var. *horridum* on the sunny waste site at Shonan-machi near Teganuma, Chiba Pref. (left; photo by Mr. Y. Saito on Aug. 11, 1976) and its flowers (right; photo by Mr. Y. Saito on June 21, 1977).

なお現在、本種は関東や東北地方から散在的に見出されており、一部在来のアザミの仲間やエゾノキツネアザミに似て非なる一品として扱われている可能性が高い。したがって多年草であることから、恐らく既にかなり広く各地に帰化していると思われる。

本種は多年草で、Fig. 3 のように横走する地下茎を引き、これより新苗を發し群落をつくる。根生葉は多少とも葉柄を備え、雌雄異株。茎は直立し 30 cm~1 m 以上にも

なり（原産地では2mにも達することがある由）、ほとんど無毛で上部で分枝する。葉は濃緑色で光沢を帯び、披針形ないし卵状披針形で深裂、互生し茎を抱き刺をもつ（Fig. 4 参照）。頭花はほぼ球形で多くの管状花よりなり、桃紫色で長さ1.5~2.5 cmである。花期は6~10月。

ところで本種はヨーロッパ各地に広く生育し、また古く北アメリカに侵入、現在、アメリカ合衆国の北部および、これに接するカナダの南部地方に広く帰化しており、路傍や荒地あるいは鉄道沿線などに生育している。

ともかく本種は、その地下茎の性状から、彼地で Creeping thistle（北アメリカでは Canada thistle）と呼ばれているように、一度農耕地や牧場などに侵入すると除去困難な強害草となることでも著明で、まことに厄介なものが又1つ我国のフロラに加わったことになる。

なお本種の我国への侵入経路は、その現状からみて恐らく原産地のヨーロッパからではなく、二次的生育地の北アメリカからと推測される。

因みに本種は極めて多形で、毛の有無や葉の切れ込み（形状）などにより、ヨーロッパでは従来、多くの変種あるいは品種（あるいは種）のレベルで区別されてきた。しかしながら現在、これらの間には所謂移行形が存在し、生態的あるいは地理的観点から少くとも種の status で扱うべきものではなく、それ以下のランクで考えるのが妥当とされている実状にある。たとえばアメリカ合衆国の西部地方に最も普通の形は、var. *horridum* Wimmer et Grabowski と呼ばれる、無毛で、葉が深裂し顕著な刺を具備するもので、近年、我国へ侵入しつつあるものは、これに属するものであろう。なお、var. *argenteum* (Vest) Fiori は、深裂葉の下面に白軟毛を密布するもの（ケセイヨウトゲアザミ）で、この形は前者よりも少ないという。さらに var. *mite* Wimmer et Grabowski といわれるものは葉が切れ込まず波状縁を有し、ほとんど無毛の形である。これを一応マルバセイヨウトゲアザミと



Fig. 3. *Cirsium arvense* var. *horridum* with horizontally creeping roots observed at open sunny waste place in Yokkaichi-city, Mie Pref. on Sept. 30, 1979.



Fig. 4. The upper part of the plant shown in Fig. 3.

呼んでおくが、これと既存のエゾノキツネアザミとの関係を検討する必要がある。

なおニューヨーク植物園のキク科の専門家である A. Cronquist 博士によれば、この葉が全縁のものが Linnaeus によって命名された本種の基本形であるという。しかし欧米の諸研究者は、これを上記のように変種のランクで扱っている実状である。

このように本種の分類学上の位置や nomenclature に関しては、彼地においてもかなり難しい問題を有しているように見受けられる。

一方、北アメリカの農学あるいは園芸関係者は、我国のエゾノキツネアザミと本種とを混同して考えているようで、したがってこの両者の関連については、今後さらに検討を要するであろう。いずれにしても、ここでは飽くまで近年、明らかに種々なルートで我国へ帰化しつつある *Cirsium arvense* (L.) Scopoli そのものに限定し、これ以上の問題は将来の調査にまつこととしたい。関係者各位の御教示を得られれば幸である。

蛇足ながら本種の和名は、上述のような分類学上の位置(学名)との関連もあり、多少とも厄介な問題もあるが、一応便宜上かつて筆者が使用した上掲のもの(花粉症からみた外来雑草の諸問題、耳鼻と臨床 22: 654, 1976)を披露しておきたい。なお、我国でも白花をつけるものが採集されており、筆者も 2 カ所からの標本をみている。これをシロバナセイヨウトゲアザミ(新称) form. *albiflorum* (Rand. et Redf.) Hoffmann と呼んでおく。

Summary Two species of spiny composites, *Onopordum illyricum* Linnaeus and *Cirsium arvense* (L.) Scopoli, both native of Europe, are reported as newly introduced weeds to Japan.

The former, collected by Mr. H. Ohta in Mie Prefecture, is assumingly of temporary existence. The latter species is considered to have entered Japan from Europe through North America. This species, which has already been reported from several localities of Honshu, may become a noxious weed in Japan.

(東京歯科大学)